刀劍鑑定書

わ
97

国立国会図書館　　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

刀劍鑑定書

わ
97

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

一天國 上ゝ御物 文武天皇御宇大宝比 大和國
太刀乃姿目見横口傳のるすきうひ板目
ふしこまやのと地をこまくさへつゝとを
たるへ孔心すさきにしなみ乃とちとせうるを
へる浪乃あらひのこしうるまそこ乃と
くなるきうひとすしもふこうとなき地
たるへみにふえねしゆえちくさくく焼
きめしつとこみる神みにあしかし焼入れ

明治 43.4.8 購求

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

きんしやうのやきは乱しあり、はゞはやせ姿
ほそくきつさきひろし、みさきはふし白し
鳥毛とし此口傳あるへし
一 友光 下上 同御字同時代
太刀姿の様かはりしのきはひろくそりもしきは
柾目まてはふくらこまやかに地きつし小乱
刃ちゝ焼ぬうしもとをほそくすくに焼あけて
物うち乃あたりよりてひろう刃なくさすく

之まきりてあつしもちろくぬかいおちま
鍛かたは丹乃いろへは上手也之口傳あるへし
一 國次 後醍醐天皇御字 之徳氏國俊嫡子
太刀姿ハ大をかへ切先のひとりハそりふ
り大略あときは極て面ふかく國切にかゝりて
きふさひ板目ゝ就し焼そり小乱刃ちゝ焼て
きくハ黄金刃に是を焼入かゝり刃をそこ
まつめに上白しき佛乃心一心ゝ黄刃の匂そ

いらくとかえ多し乱刃乃ほかへいこまや
かに刃を雪にいはて火とりを能のけんに
すると能ゆかへこまやかにしてしつくしき黄
刃乱心酒打多物ハ火とりをすくる目とに
してかえを雪一といはるによつまかえ
あらくおゝし上手乃ゝ刃之物ハのある
つまりとへハゆけしつまに多し京物ハ
竹毛きうこひ柾目多物ハ此能にのきの

て板目之地をしつまくまつし大なる大刀乱刃
やう秘るかくのとし刀の能ハちかひあらく
三刃目をきうにいなると乱刃のかえ多
すくに刃乱刀ハ地をこまやかにきうひかへし
しつくしく焼之ならしのへり國としよりひ
殆めて但國光かもかいると右のことく極
をこのんてかくて極黄しかれ口傳あるし
一天宮利下上坪源草院清宗文永比

大刀姿の國行はいろつとのそれ言ふ志のき
ひきしいかつと中きつとひ疵目之地ゟ一白め
小てあかくはふわつけやうなるゝ事の
ゟ一切をきやふに見えつと初先中腰を
一丈八寸の内に丹のそとかわつるを焼之小
えおゝしそへ乃丹國切に他ゟ有三〇
に中はつとをし焼之國切よつといおそし
地には有きかゝ〇乃きゝひまつとてゐる

をも焼之丹ゟ之があをしきゝひぬらきゝ見
にゝりかなしん天國よりはたるかをと獲り
和口他はあらし

一安則　一系渓御宇永延比号清新大受
大刀姿のさ〇あはくいかつときしまてそつとゝ
ゝ目をすくみに小え多しきゝひ疵目
いかにもこまやかゝ地ゟこそこつとゝ見えて
上大せやかにしろしつとくいもしくとあさ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

地乃上にすいさやうなゆえいうるかことしそこ
まうらくに志ろくすきとなる刃ろこ口傳
一行平下　同御宇　寛弘比
太刀姿ほそくり神つ望と志のきひろくみ
はからすしきうひ柾目まて地ろ志ろめ之
孫もき頃に見えつ望ほそすく刃又少乱刃
の神乱し燒之小え刃ろ望し丸ふ
に地之出て坂の行平よつと以あ之二字落ま

ゝ井さくこ之れ口傳まつらし
一當麻中上　國行下上　後行下　友清下　友綱
後醍醐天皇御宇　元應比
太刀姿志のきひろくすなりしあ之切えつまや
かにきうひ柾目之地ろ望くまうしたるこ而
やうにしかつ望きよ之刃乃心こしもとをいふ目
そく燒ねして一天牛乃刃ゑ之ハねをきやこ
刃やとらくなるよつ望してまつめにさろしるき

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

なるゝ之所えゐ〻しかえやきにしる之太刀
小ハかゝへ刀あつを大服ハ之刀なきゆ之此所あ
まるを治をすをまゆ之當二人と升すゝる
ハ多くしなのこえルんすらと之をすりとこし
其すゝひ見すわ七あつを同此な神とも治を
よつを上中下の神つをめきてしぬんへにしなるハ
ね遠あるへ刀ハかみしのくたをひろ
く此之えろみにくしれに他ゆくし

一行信 中上 重弘 日 千手院 此二人為流祖師
亀山天皇御宇 正元比
太刀始をつを寄くしのきひろしかしに此
地をつをしにくしきゆ之すくみにこあを
焼入つるゝみるをあめにしろくなきゆるゝ
切え中地のひろきつひ何とも見えるめくし
之の神とも相目ゆ心あつを此地ゆくくきるゝ
と小能而流進物に入之但行信のるゝ中二

見恨乃るし太刀ハ志のきれやすりすしのひそ
ひら乃尤すりたこ之但たゝきもと二三寸斗
たこやすりにすりてなのこえん大すしのハ
にすりたるしうるもあつ事しくろし
のすゝ千手院と銘をとらるに祖父親
源乃見われ院乃字になりひあそし
同銘ねゝしせんとも行信をしたつ數と志
やうへんすゝし銘乃ゞ恨乃るも

きさしめくきあるの下に行信とすつゝ
しめくきあるの上ハ神しくしから
すもきねもてめくきあるの下に千手院
とう清刀れなのこゝ○かくましてハ
あつ中心乃のもめんをぬのくとるにはわ
ぬこ○れとくに見えるなのこそこそ
りんしらのきうなるをかぬめるこ
とくにするゝ但ぬきしあつ日銘ね

ぬきにしるしのうちさころ多しえ上記
乃見慣をりきこしるれ之
一則長下上 尻懸後二条天皇御宇
嘉元比

太刀姿なをくもし志のきひろくひき
し切えしつまるつまいなつまさるすく
丹なとこのんて燒之但乱丹も多し小
え乃心に口伝あつまみる御丹ある足

あひ乃目をきにはいふこゝろやりと丹比
ぬきにはいふえしあし尻懸二代
あつまり目指之おしちゆやいと之源ハ
なと御つまえ二代ハ大和則長を并て
國乃字をしるす源ハ大和乃信則長
と并秘るゝなのこえ久しく前のやう
にて乃ふきしにすりて志のきひろ
つまるまゝ乱るへいのへにきるゝや

すりすりのこなのこゝろ○まろし日弥お
おそ地なりとくく心をつれてなるひ
を心にもちて情を入て見るへし我
口傳あるし

一包永 中 後醍醐天皇御宇元亨比
太刀姿也しこしもとそりたるしのきひ
ろしいかつきくしたくきもとぬんはわ
るつを切えつくまやのきふひ柾目よ

ていふしこまやのを地をつ見しかたしもとゝ
いかにはそり燒いるしてかのうる心を位
一天上あるつをひろのうるゝ神を燒
えにえねくあるしこまやのなるにえし
あつをいくをしるるにえの心はさんの
ぬりぬにすみのをぬるひかけるかこ
としいかにさへうるにえこしけくしく
すりうるみしあこのえわをしか燒さい

こつと切えとくにえこつと丹ろこまるめに
しろくかのこしかさのしあつし日給
二代ゑこはしめ大給之地をしてしるめそ
をと神つとなりしえり乃心九州乃安吉
よのにるつと大給はしるやすりあるしはの
小給はやすりこまり之刀乃ひかき所上や
すり下やすりさのみすしかめ之小給のまれ
やきに傳中西にもにるつとはしめ乃包家

十八

十九

注進物之根日他あるくし
一貞吉 下上 貞清 下貞宗 保昌 正常
後醍醐天皇御宇 文應氏
大刀姿モ鍛ひろく廣かぬしきうひ
花目は地をつ黒くしるめ之丹しつ黒くまる
し太刀しつしきを燒ひしむるを但太刀
いかえつとあ花目乃うみめあくつと於
ねうえすしかひうるゆはしつとにえ入て

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

見るとこゝろ不しゆはしつまをも焼き花のわ
て多しきうひ同しく穂とも上るゝ偶
一宗近上ゝ一条天皇御宇永延比三条小照
太刀姿の穂つゝ切先ゝはまやかゝいかつゝ中きる
い皆目ゝいかもこまやかゝ地ゝつゝ忘くしゝ
きるこあつゝてひかるゝ位置あり地ゝこゝめ
中ころよつゝきうひ上ゝまはなりて来るゝ
後めきうつゝそろゝ地ゝこまろゝ穂と

もとろめきてはなきるこあつゝて大刀孔
忘のきかひろき地ゝ大服ひをかゝゝか
そすくみにこあしろ入て焼ゝ小ころ
みのうつゝみる穂しありこうしもをほそく
乱みにやきて地をすくみてあつゝふへぬ
しなゝこハえん目そくするゝまちかゝ
やすりゝ中こえんかし後乃まくきり
しあつゝまるきしをこむかくかしてかく

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

えなりくとあつまみるこのつまくこわきか
ほのきこひ之風情京都を見えてさん
しやうへ稱口傳なくし

一 兼永 下上 後朱雀院御宇 長久比在國ゟ子
太刀次々 純ふるつまきこひ地ゟ之みれし
やうまでも在國日有之但位ハ次よつまた
るゝなと稱極なかく太刀刀多し

一 國永 同御宇 同時代 在國ゟ二男

太刀次あやの小紙定利にふるつまと但地ゟ
ゟこゝハ有るつまきこひ相目之の事なる
地ゟ之志の稱なくつくしきゟあつまて上ハ
いかつまぬりく志のきたのし切えつぐまゝ之
乱みを燒みたこそこハつまめまて上志ろし
しきゝ物之此外大和に國永と申ゟる
をくあつまと時代ほゝ京國永ハ國の字に
かきなりひあつ秘書口傳をくし

一國吉下上 亀山天皇御宇正元比
末太帝國行の父之本之雅
太刀姿志のきこゆるくみひかりすしいかつ見
けるまやのくきうとひ花目地をはきやまて
すこにあのきかと上志しめ之みとかつ是之白
かへもむしくくあしこまやのに小さくるはいう
けんしくさんしやうくなのこそ目をとすると
えぬし行腹下よりかすらりひかつ國

行ハいたるかたとゝ御ちるすえかゝるひかわ
一國行 中上り物 伏見天皇御宇正應比 末太帝
太刀姿をわかるし大服袍をかくと目の中切え
も中くきうとひ花目こまやのくと地をそこつ是あ
にまくく見えて上ハあのきかと みいまくき本
ひかく焼かてこしなし一尺斗を乱みに焼て
上へ黄土みに一二寸斗又かく斗おきて
あしを焼入うつと みかちいかに小さやのに

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

焼ぐるしあつといへは大夫房なる國之すく
みわさわ乱ハいかえやしするみ能大
刀ハ備前一文字なとのりしかえしなし
きりるひ花目まて地さつまく上わさにあつく
巻しるこてむくやきうる地の國之二字国俊
上手之ハ太刀と中うる國に湯はしつと焼之
切先のうらすくにしてか乱るゝ国あつと秘
事いふすくみ直焼に正たハ久保之通也之

太刀ぬしちのきをひろくろしちつとしのき通
すくみあつきにかのハしてぬときいと目とゐハ
えみわさハあつき太刀ぬけのあつとみすくみ
なり績いことしもとちの五寸てかは黄く焼之の
へりさのみみうくいなり二字國俊の刀ま
代々之者せんにほと地さ若楽はうつとくあつ
此乃國俊同前之太刀わさなきこ國行を続
取りし使同前達代あつと初上手　次第と

神月二代目ハ米子之丹波のたゝに住まい
いゝやうたるハ国とし云下ハ之口傳
一國光は配醐天皇御宇嘉暦比国俊子
太刀姿国俊に似つゝ有かほろしハ目ハ中ゆ
えし中之のさゝ子あつに作之きつゝひ花目まて
地ゆゑやうのに見えの望地つゝくあり
乱刃にてまをハやうにして乱刃のさきを
こまやのにゝろへく腰本に焼之そんの刃此

心ハ国行国俊に有之なるのゝちなりし刃
なれをの貢めに焼之刃乃ゝこあをさ見へ
て刃子内にきつゝひ乃もくたるゝすまきに
望きつゝひこやうなる心之ぬうちぬやには其
心なし口傳に云すく刃の太刀ハ刃ゆちたる
しとるやうに見ゆゑすく刃なれはいろへて
焼之ふへあらく地にゆゑむしまこ刃乃ゝへか
あまくかゝんすきこゝるやうに見へ之ゝ望す

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

さ丹新太刀ハ之れなり焼きはしすて傳ふ
之に丹つ刀のすく丹ハ國俊よつとなりし年
くゝ之れなぬとく焼きはしこと地のみ殺之
あたれてのさうに見えつ刀新見へ神丹
を焼まはきこひ不しせいを入ふるを見える
つと地丹はこつしき之丹まはいはいきを焼て
見るなる刀多し此作し乱丹はいのき比る
るかきこひをあげ之國としよりすく丹新

しくあつと中くに地ぬ丹はあつしきあつ
國ひのみと云一説あこもちいへかしは同時代之
こうひに太刀を傍合て家々の格を書て
用るもあつとときこゝこつと定利の中古此
姿は國ひのみのこゝよつとも先人の神之可極
いくらか見口傳

一國長 後源草院御宇 弘安比國俊の
弟子中鴻小云

太刀姿志のきが黄くたゝなかせしく作之
定利に作るつゝきうつひ花目之ハ目の中地を
黒く志るめ之りないろあたけ云ゝ大略すく
刃を焼之又小乱刃をしのうつゝ乱の心をし
焼之すくに刃ハ太刀刀ハ國光の不出来也
に作るつゝ地むらあらし刃ゝこつ黒くして刃の
上になまみある作之不ゝひきハ之作口偽
一光包下上ゝ好能酬天白を造宰之徳武国俊り

キ子小云 外津来是之

刀ハさしぐつぬくやうに作大略ハ目つゝみひ
ゆしこれにしもあつゝきうこひ花目ハ
小しこまやかに地をこそこつ黒めまてをとまき
見しにしあのきうこすくに刃を焼かのる
つゝるもあこなるし刃姿の國俊ゝ也
但之刀に武ひけに大略ひろきこれ乃
まりを不ハえるをさきうつゝとくく

に焼とむるに小乱又のうつ丹を焼し刀
ハは俗おそのへり就とくやくにあつまん
おたをわ是長光の子とし上手と見
うつを國としにわ偽をしんるに此ハ文保年
中なるへし太刀をいつまる見ゆ中常
来ハ刀斗とあつを秘るへ口偽をあつし
一ツ戒 中 光明院御宇暦應國俊子
太刀姿の目をくしのきたりしかをすへ

丹に小あしを焼へうつをきたひ柜目をてこ
まやうなるたるこ八目つを中地をこゆり
つを就へるこ此ハ丹をうきつをうるなしひ丹
ハ陽平を小乱に焼て俗おの景光な
とにかうつを但よへすくに丹にやくこ地を惡
し丹をまつめとろめきるるこ柜を
かく太刀ぬしにへあつをてこまやくこ國俊
のうつ又子子ちる云ほ進柜に入こ就中了

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

久信の了戒と諸をともちて少せ、る太刀
ぬ、し父子孔刀小てきたるひの心をし
るまや然而然ふるつゝを神ちめいのる
なひつゝひ中この志ゝぬきゝ以下ゝ多
し其上父ハ姉し久信のなせ作ハ又姉
ちゝきつし子孔きたるひなともこわき
きこけんちんしをきる太刀多しおや
子なかし恒きかれ上手之様口傳なし

一信國下ほ圓融院御宇應永比戒孫
太刀次見しかくそ有寄しきたるひ恒月之板
月孔とくにもく月孔たるゝあこハなるとあさ
し地をこ志ろくなふ有つゝ見るにしろめくを
あつと大乱をものゝ利乱ふし焼之ふへるし
すくみハ地こまやゝ地をこもつ志みあるとみ
いろもつ思しうきなるこ之然に乱みなふへ
心あしあひの目そ然ハあらんふへるつゝ乱

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

刃形ひろき所は焼ちきはとるやうにすくまく
のこうしてあへは焼ちに刃のきえぬあり其
所は小ちこまやかにしてあさき刃しきなし
同銘三代まで右の見様おなし上にも記
いかなる銘も焼には下より中信国より大
み銘は刃はなし焼は広く刃わたは焼も
地よくわろしさて三代まきぬ上にのせこ
つききおりりはすくなく銘三代の所

焼にしおしとなり

一國友 上ニ下ニ銘 後鳥羽院御宇 元暦比
粟田口 藤林

太刀姿は細し切先はつまやかにしてひあ
焼にはおいちつきぬしきものありて小ちこ所
やうに地きよくひろわあつてしまこそ小太
刀形はそりいかつるさしはこきのきかせは
刃のまうへくそのまへにあかしてわらか見へし

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

たわ山ぬしみひに油はつまを焼之大刀ハ
地ケあるつまよわよえ刃ふちをかのそてに
へ刃をこ刀ハ山ぬくらに焼之目しらくしく
えわみしかくしんしやうへいふかしまい柏口傳
一則國 中上ハ 順徳天皇御宇 建保比者見
太刀姿目そくうつまうしきうひ柏目を見
ふかうき目とこまやのへハ目ゆしゆえつ
むるへ地をつまりきしめきうつまなうすく

刃にみのうつまをも焼之大略刃にくしあるを
焼之ふんわゞし刃をまゝめふてしろし刃のとに
こまやのなるもくめのきうひあつまいふもさえ
うるきうひ之ハ目ん字をこのんでかくへ之
言んそんをとらぬやゞにあるへ刀ハなし
を焼つむるのへうまをやけしみしり
中すく刃ハ刀上うるへし乱刃のうつまな
と地をうすく神ハ柏口傳あらし

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

十五

一國吉 [illegible] 四条天皇御宇 文暦比

大刀姿ハ目そし志のきこの一つのくひろし
いかつるなし歩るひ相同いかにもこまやかに
うけくしきてるあるやうにきつると見へ
たつるとうつるしが寄し地をいかにもまつしか
そすくみを焼之但お来物ハは中すくみ
あつるは非ハも二重みれあつる國友の二
宇みよつるし相志んよやうし地のそこを

に歩しめきあこはとしいたいろきあたんも
くれきんのことく人焼なるなし物なとは
いかにるるひのくみ為にはくみにもの
くかへ多し刀の目そ杢みまいしつかすこ
かなし地をるわろくふてきこ嘉吉元年
に宮の物あつるて天下れ物千かんなし

一久國 後鳥羽院御宇元暦比國吉守

大刀姿ハ目そくもしきのきかそくいわ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

かしきうひ柢目こまやかに地ゝ青くむ
ちさきこ地ゝあるにあしたゝ丹の内
へふかく焼入るゝ山口傳に地乃きるゝあ
ちを鳴心得うるとゝ能而地き神あり
銘をきりて活を地に入つ也秘るゝ
丹ゝ白し丹ゝ如ちすゝ白つ也如
さんうるふへすゝて丹ハ土ゝ新發五國
光に似うつゝ活ゝしくさんしやゝ

かへりあつゝ土せん焼つめうるゝあえし
を此乃上手ゝ根口傳ゝ
一國安中上苗 同御宇同時代 國總兄
不刀姿ほうゝも土のきうるゝ切えつゝ
めていほわきゝきうひ柢め稼神ハ
たゝ地ゝ可ゝくあしほ一ゝ丹を焼ゝ
丹ゝ土あめにのうゝ見えて上白し刀ゝ
地ゝ丹ゝ心も太刀に向し刀ゝ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

まてミ一かりくゝ諸ハさうにけれ今ハ口傳
一國清 中上り物 同御宇 文庭治 比厚有常
太刀姿國安にかゝるつまいかりさいしきうひ
花目まて地ちこゝろし目そすくみを焼之
地ちゝかきんまして國吉にかゝり太刀も
刀もそを焼つもるゝ刀ハミこゝ之
一有國 中上り物 同御宇同時代
太刀姿なりとゝ也しきのきせたくゝるし

國安に似りきうひ目さのみうてかゝ見えし
すこまやかゝ但花目之傳中物乃とく地にす
みうるもうあり地ちこゝ思ひ目そすくみを焼
かえまこみきゝしあをみあつま太刀ゑそつま
こゝろくハ目つまこゝ之
一國光 中上り物 御宇多院御宇 文應比
太刀姿粟田口物何も同心之目つまこゝ之
きうひ花目いかにもこまやかゝ物ゑるゝ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

た之地をこそこつ見めるとて上まつりかゝる也
丹を焼之こまやかにうつくしかへ也
めいをさしふしもすゝ之相州へ下国あきれ
前と見えるつゝ太刀のうつゝ也ゆへ
一吉光 伏見院御宇正應比
太刀姿ほそく志のきさ寄くせたく作之
切えも太刀乃さしわりしいるゝ所にて志ん
しやうしほつゝかゝうしきるひ応用に

て地をまつくしてこゝにむらきいるあ
つゝほうすゝ丹を焼之なたきのうつゝなし
焼之太刀は沸おゝく丹のうへいふし白く
音あとし此作乃太刀まつ神之栗田口地
乃きるひ何も応用之此作も応用乃きて
いなそいあ神其丹ゆらゝ地のひわのら
てこゝ丹あるえは応用之丹のよりも地のよ
まては板目のきるひるとよつゝ乃也本地は

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

板目乃とくたるいなし板目のたる所は
こゝ志のことくなるもしくあとなりたるこなる
きうひもあつときうひの偽板目と板目と
所不分とをけつゝとする如之ならしめ
をみしかく焼之但えわをもく焼さけ
たるかいなかしし乃なわさのみとのらぬ
頼にてえわにそとのるわるゝ焼之
えわを見しかく焼ふはなかしし所なり

をとのるやうにしたくしく焼之刃ハたゞき
なをの乱るゝ心よやきてぬ出来ゆへ
ぬくゝ目すき心に焼てさきのつとき頼
に焼之能而上手之刃を焼かぬ所にすや
きすると有つと秘るまゝ刀の作志せんとすき
もあ得ハ大服のさ○あつにさん何とする
くとのる頼に作之がさしこれぬく心之右
相応しんとをし小乱小節親子有四節

包丁のいきつき鎌倉子孫あしみにくく大
かさなりこ計寸法大きさためおもき守
二ヶ所口伝あるべし
一國綱上手也後深草院御宇　建長比
善兒ト号鬼丸是之代にて物之
太刀姿かほそめにて也一切又くはまや之
土のきか黄くいほつときくさ之花目まえなど
帯しあつきなしことしつさいは三尺の太刀なる

焼は腰ほそく二尺あまるを直に乱みだれ焼之
ちさく家を焼てのひつきおもりしこしみはちくさき
みさは一寸斗之腰本をほそく焼てえ
あるをやきおろししすくみゆる之上みさす
くなるはい本にはちのちきゆるやう也之
いるつはのとしひつきあつき黄みのはい三寸
つおきて是を焼くるまたえ多くみの
きはのふしまろし後は太刀のていやれに

國綱と升ぎ之刀ハ山門住國綱と升ぎ刀ハすく
刃を焼之ゑわをぬのくふんをもに焼之
刀ハいこし刃をやのれ和口傳あるし
一國光 中上作 好平多院文應比 鎌倉
太刀姿目うし志のきそるくそつきしうし
ぬるひ松目之ハふしこまやのに相きる刀
ちるえ之ハ目ぬるし目そ刃を焼之地
ゐこそこつ之め 上ちるし刃ハそこまめ

ふて上しきやのにしるしふんしこまやのにお
をしまさこをぬるひかけるのとし
たせやのにきてめそこつを他とも太刀ハ
なり刀ハ吉光ふしをとしいのふしりるの
ぬくあるつを地にきるひのたる二すしひら
めきてあこかしあなりうつくしくのみ
しかくこみ目之をしゆてに劔うしにあ
地り言んなん字をしそこまきてきるれ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

ゆゑ焼ある太刀ハ多しそれ乃ゆへハこの
やうにあつと丹ちこそこまるめに上ゝきやうに白
しし同銘二代ハ初乃大めハ上手之仍國光
正宗為人乃師となる時の國宗古傳ゆゑ
とし丁子丹なし焼之但そ乃大路ゆゑ丁
子乱をえまて焼しまていて其内のるさ丹
ゆゑになまみおるゆゑきよひ上とハ見えし
さるゝ形口傳ゆゑとし

一行光 伴上り内 同御宇 延慶ハ
太刀姿目そめまて七しし切えハつゝまやうゝき
うひ板目ハ目りまし地ゆゑこまるめまて丹ゆゑ
のる神乱ゆゑし地ゆゑ丹を焼ハあつと目ゆゑ杢に
ゆゑ丹ハあつと小へおゝし丹ゆゑ白えしてまゝ
きもくめあつと太刀乃見やうしのとし刀ハひ
たつゝ丹ハあり目ゆゑのるゝ丹とし黄杢丹ハ多し
國廣國光ハ能ハ丹とならしのハりかゝ

三峯乃志ん黄しの地のあまり 鉄梅切
物のなりにあつて大進之房作と之 和口傳なし
一正宗とゝ和 花園天皇御宇 延慶比
太刀姿志のきかせたくハ目を生さしにたち
黄く化之切先のひろつときらひ板目もてさう
つとしらるたる之地をあらくむらさきにき
前あつて乱丹を焼之のろつと丹を目そみよつと
しを焼ありしらるしあつ二ハかふにかへあらく多

し乱れハ短冊丹なくて地へひしくと焼入る
丹あつて鋼に短しやくの風に吹きてひしめく
かとしかえ乃心は篠乃とえまとす君あり
るのとし地あらく丹志のくかえまつと大乱
いひこつ乃心之又のろつと乱ぶるのなりある丹
あひ乃目そみよつと半目乱とくなる玉を丹
をもる神て地に焼之のろつと乃目そみよつと罵
なるすなをし焼あれ之あふきなりの丹し玉

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

入とく地に燒こつ但あふきなわ刀ノ丹腰な
小あつ丹丸玉丹ハなりし丹因に大服燒之迄
にしわ〻し刀ハかりさ〇ひくれよたくあつ諸
をすくみよハ太刀刀さにかく乱みにも
めいをかくるも大小にあ神ともまゝ神之し
太刀ハ中こ岩丹丸し刀ハ角之包すわし
太刀ハかすちうし刀ハあとくと上やれ
つをありてすちうし大かくめくきあるも

ひみところもあつと和そきく和ハ口傳あるし
一貞宗 仲上 光巌院 御宇 元弘比
太刀次ぬ正宗にあつといなつときこと三ヶ
もあつときうひ板目之地ちこまきやうまて
あつきうすこのうつとみを燒之正宗のとく
玉丹しわ〻小元多し太刀ハそのみわ〻
うれ但江刀ちまに居住の時ハ太刀
しわ〻く作と見へしかつとそれハきうひも

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

みきる正宗にかゝりけれをかくゝ太刀の
見損大かゝ正とくゝ刀ハぬときひをかくゝ
目ろきをそへるつゝ大服ひろつゝみを燒之
地に目しをしたくゝ見さて三者之ハ多し
其外其ゝ燒たかあかりてやんと思ふ
刀ハ情を入さるまや太刀ハ正宗ハしを
詰ぬ目と見ると但太刀ハ刀目とまへをハ
やのしてあるゝ刀ハそとすくゝしさせ志

るもあるゝ相口傳ゝ

一秋廣ハ後光嚴院御宇　文和比
太刀其姿目ろめに志のきを守るゝ作之ハ
ゝききそへひ板目之地ハ刀ハ志くゝしさけ
利鉤拖なり地をするゝ大服ひろつゝみを燒
地ハ目しをしゝ燒ゝありそ乃よらに半月の心
もあるゝ地ハこにきんすこそを黄ゝ燒之太
刀其姿廣光にかゝるゝ但地ハこかゝる之

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

ロ也廣光乃とし ぬときひに目うきをそ
へてかく之位みれとすまくきつひ也
てそわすき事 廣光にかつる之口傳秘
事之秘廣ハ太刀ようすれ刀ハ上ノ口傳
一國重下上 同御宇同時代 長谷部
太刀姿ハそくもしたゝきむぬんたりけ
としきつひ板目ハ目のさし地ハ
すこくかくこゝめくみ乱すて地ハむを

燒入ハつまり刀ハ[illegible]の心を燒之地ハ
にすみつるしおつまりはしなりをみくぬ
くしほとをたるえ燒入てみのゑようなり
うめ之ミ目みへわハ一臣とひろし同國信
ふく箱乃みも黄くみるこまめに刀ハ
つまをきしして三みほ之正宗ハ手子と
云相口傳のくしし
一義弘中上ハ 同御宇 建武比越中松倉

大刀次七しのきかぶ次しハ見きさ
きつひ板目ハかしこまやのまてむくやさ
こるゝ地をあつめに見えて見えてむらさ
者之のゝ見乱刃を焼之切えとのひこつ
かへこまやかてれこしことくハすゞ
をさきこることくなる刃ぬちゝ刃ぬ
ゝしあつめまてこしきやのにさろし大刀に
ハ切えあるつゝとこしにさにけれ

なる見ゆるの刃を焼之ゝ刃もそに一ツ
つゝ玉刃なり鍛とも乱なりまゝ焼之の
へわかも乱るゝ心を焼之正宗と義弘の
目きて一位乃やうに先代よりつゝ傳へこつかか
ぬ作の内を見えてもくるしかゝぬ
ハ地を刃かへかく別之正宗ハよつゝ義弘
中乃上に近世栗内ぬすハむ一位らへし
ゐかこ此次第大刀ハ正宗なとのとしみ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

ねを角にすりて宗人のきはしやす
つとくこにすりてみきいとくはつと刀
いえをそのみりまぬやまにすりてみるを
角にしてくこやはりし孝教ゆるすりとも
後日あし大刀も同じ様口傳あり
一則重 中 光明院御宇暦應比作伯
大刀姿もくそりうるしこのきに黄くのうる
しいなつといふもきにきつてひ板目と

あやすきのやうなるとくのあつと丸子同
も多しまる丸子同に洲ありもくめのき
ほひあるなし初い義弘の弟子なし云統
ともよし弘本の人風まて死さつ事は
正宗の弟子にはなるまた此のつと右のきて
いなとしは我家にはくしきるし之れ
ともうと本のみぬりのこりたる心をこ
ほいのる神なを焼てふ人あらし地を思

小刃就ともあるめにて二刀し太刀ハ乃
見やう目おゝ右乃きつゝひの時いそゝ地の
は洲にまゐりての目ゆゑ正宗にお偽
にて以来いさきなしけるよく燒之と
りこえんかし箱にきる太刀ハあり
中ゆゑ刀ハんかしらねし太刀ハし
ありといへともまゐ之
一國光下に時光嚴院御宇康安氏宇降

太刀姿志のきてるくハ目よりしきつゝひ
柾目之地ゆゑ志るめにあり太るこまやの之
乱刃乃上手之丁子なしもあるの神乱
なし燒之刃就みる是をかくと燒ゆ
みる是乃なるみ能小へるゝ故今是
太刀就たゝなしかほうめに作之姿しん
志やう之國宗ハ下に之事にすに志のきる
ゆく寸なしみしかゝ作ゆすくゝ刃のゝ事ヲ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

丑乃ぬるいはしきはぬぐて見とかるしく柄をか
くといふもひろし行平の師之
一行平とゝ名同御宇兼久比紀新大夫
太刀姿ほうし志のきせたくいかつと我
きうひ柾目まで地をまつしむしさきと
あつと丑のうつと乱を焼て地に丑を焼之小
乱丑をしやくほうし丑をしと立ち志を焼之
ふへおくこまやうと丑ふきやうに

丑ふちに志はみて定秀に示る事太刀
刀とせし面たゝ我乃ふとよろしひ行ひ有ある
をほるといふもつしかとひしなきやうな
かつと地之たゝ我ぬ丑を一寸あまつと上を
て焼却して行事を神を刈陽丑と
焼後し乃地をにたるへすしかへて光見
ゆるいなつきのことし太刀刀も見やう同
あ之中心の口傳字をふりし足しすやき

をすることあつて秘ことなり

一正恒中上四条天皇御宇文暦比行事の孫

太刀姿ほうしきうひ何とし見えかる

我ほとこまやかに但花目にはつぬしなし

つゝむるに地ふつとく見ゆるにぬすふと恨

なるこしあつとしすむしきのやうにし

あつと刃ハのうつとに乱内に同じすべ刃

に小足の入るなし焼之刃ふつこ焉也

上志ろし地先あつとて地先あつと切え直

刃ほやきにむるに地ふきうひ行平に

ふうつと見もすや我をすると見えしの利

五行七ー内の傳恒乃字にあつと秘る

一神息　平城天皇御宇和銅比豊前

太刀姿の神ふつと但のさはあつし志の我

せはしハ目つと中にる上ほ丸峯に梅なかっ

くく太刀おゝしきうひ恒目にいふにこ海

やうに地に書くむすさきしあつとて
光あつときしめきこゝろしあつと丹恵に
燒之ののこゝろをし燒之いかにゝ寄し丹
ゝこゝろしかんもなりくとあり私に云
元年見し時八寸余乃刀きこひ月なる
との如なて丹ハ小みゝ神なりきこ○あつ
ハ月中なるに正路あり千号大同と
すこき千号八寸斗乃刀あつときこひ丹

ハ五

ハ六

しかいこす年号天平にきこ先とし地に
ハ月山にかゝるゝ物ハ作ゝこまつく光
すこ丹しかまつめに白し根口傳
一國村下上好龍酬天皇御宇元徳比肥好
大刀姿目そ也し志のきの黄りへそ
こすしかんなつとすこ切先つくしるゝハ月中
艇柾目之来國はかゝるあり地ゝこつ志くとに
しろ帯ゝすこ志丹が足大と入て燒之ゝ丹ゝ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

くとあつてこまやかに[illegible]
めと同吉也当来慎同[illegible]之国特にかき
しつましなうしぬくなりしもの
同時かくし延壽ハいつましみ地なりかく
く見えこうと古聞のきこものやうと国
村ハ来太郎の孫と云へ相口傳あるし
一國綱下上　菊池延壽　新
太刀姿也しぬんなれ云ていかつと雨に

雅形目之地なほむくやきこ見ある地をい
志らめ乱みにかけ[illegible]焼之小へこ
まやかに[illegible]安よし[illegible]似り大眼相なか
くと丹のる神乃心に焼之しつつと雨つと刀を
我乃丹をいふ[illegible]焼之刀小ハ相
中へとせてかくと相口傳あるし
一正國下　一条天皇御宇永延比薩摩の浪平
太刀姿也くさのきこひ[illegible]しいかつと中丸み

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

はしねしきうひ板目にてうすまきうるは
つこ小乱刃又目ろの小神なとは焼之地ゟ向
刃はかゝ思き心之大服浪草じゝと但上下に
ありきうひは一様之うこにきうひめあり
てとんあらそ神さるしあるを焼つゝ之
かゝる心あるしあり安光 安満安俊
助近行安吉宗行満安安 此新波之
お来様かつゝりあるを大ゝ目おかゝ

かおさきゝ入かゝりめ之
一行仁 上ゟ 後鳥羽院御宇 延久比
大力姿そりそるく丸茅之大服極をかく
いふしひろし刃すくゝ小乱をし焼之地
ちうこ思くと一志ゝれうこと刃ゝこのまゝめ
まて志ろしさへうるゝこと切先のとらすく
刃まてお神たし刃ぬきつまこうる様之を焼
ほむるゝこかゝへわしあり志ゝ九州地ハ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

上中下ならに縦見る中に対に行仁上ゆえ
少しはなりくとあつて
一西蓮　土御門天皇御宇正治比筑前
大刀姿もくたゝ黄くさのきしの黄
ひきしいなり中丸茶ひ拂しし大服梅なかく
但ぬときこに目うきえ梅あつて梅黄しさ
やうぬなり乃中宇なし地に縦板目にて
地をつまし丸なり乱ふくるこまやうと

私に云ふ時刀剣ひろつし丸を見してあれ
たゞ黄くのさひなりすくこのにのさわ
こつまりないろはなく見しこつまと又は花面
吉とすくるしあつて両辺とたゞわすし通
一實阿下坂城川天皇御宇貞應比
太刀姿ほうくもしさのきこるく茶すす
しいなつて中縦板目之地らしさろしてこ
にもくめなるきこひまと乱丸を焼いまし

刃ゝ事しかれはあつと
一左中 ほ光嚴院御宇文和比實面子
太刀姿たゝ黄りく志のきゝ事し唐そこまで
脇板目ゝ切えのひゝ事ふんおゝくあゝ
乱刃乃えのこぎりをのとりくゝ事
とりハ皆ふえゝ切え乃内ハ乱刃ハ焼ゝ
但皆ふえゝなりしハとゝる内ハ焼ゝ刃の
ゝのまゝめしかるし刀ハ和のゝ神刃ゝ刃ハ

そりゝ事し 備倉五帝倉ゝ弟子と云同宗
乃太刀そ事ゝしハ目ゝかゝく脇板目まで
親に相し但生あつまてたゝこまやゝ地
ゝ事くあかき心あ事脇本を細乱ハ能ず
ある事黄ゝ乱ゝ刃ゝ黄ゝ黄ハあり
すみゝ神の心の目事あしゝ切えのひゝ事か
うしなゝ丸ゝ焼てかそき地を刃ゝ内ハ
焼入ゝ事かそのゝ人ゝむゝく心に焼入

ますくほそき地の焼入もなく刀におとらす
ほかおつる刀ハ見しぬやうにもなく候在
いつきのちのふすくちハかおとせてき
つとふるに銘之文字の見やう是ハ銘
へつて安吉ハ横さまつて作安吉ハ
作左と打と云左の字大きなまでつる也
かくし銘口傳あるへし
一之真 上々菊 白河天皇御宇 并保元以前 遠江信

大方姿ハ作のさとうそりすくすにかつとちさまさ
大略あさき極なかくきうひなる目よていの
ふしこ焼やのおろすく丹文の乱なし焼
姿しんきやうしめいなきうまし也光世
いさ名之作口傳あるへし
一安綱 上々菊 嵯峨天皇御宇弘仁比伯耆
大方姿ハ光の作ハつよもハ目つよぬうく
きうひ板目なるかあーーさの手かせたく

乱刃を焼之のつまをもしも焼之地ちこまつくむ
くやきうちあつとそんハ黄すく刃を焼之
但ゐゝ足を焼入つまり刃のうこハかゝり白し
こしをうく焼ゆくしつまやき落ん者と
にのつまり黄き乱をやきつまり足有こ
刃と云へし梅を目ちくあさくかくこ
人なん字をもきるなきに刃にかえこ面や
にぬゝし上手へ

一真守　同御卒　天長比
太刀姿安綱にいつまり黄さひ皆まて脚
ひ鼓をわうし居こしまて地ちこまつ
刃ハ大服黄土刃にあしを焼入つまり刃と
志ろしかえぬくこまやき木枯の太刀、
二尺六寸斗之面ともに毛き梅を一
すしつくかくこ梅すこしなりし刃しなそ
幾乱刃さきいそわわそ目しぬ目し鼓道

かきしるはし

一正家は光嚴院御宇貞治比備は
大刀姿たゝかの黄くしのきせたく房の
きこしきこひ板目之地ゟこそこつ思めてと
しらけるとこまやかにしすまきけるたるを
乱刃を焼之但こしもとを乱は焼てえん
黄すくみ足を焼入るゝあるゝ小へ
多し姿の俗中ゟ小ふ刃を刃ゟまゝ

ゆゑこしわたのひこと刃をたゝしを
まゝくかたのゝえうけ吸くせたし焼ゝ
すくみ刃大刀古関のとし

一正廣ハ下上は圓融院御宇應永比同
大刀姿たゝひろくしのきひきこしわえのひ
て房ゆしきこひ板目のもくたゝこゑやか
にわとし地をしめ之晴平を小乱刃にや
成てさきえいひろすくみ小へまこわえの目

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

こまかなる丁子みたれまじへて大かたはなみ乱
みたれ焼まぜうとも同作二代目より見分
の作にはみ鍛えども丁子のなしきはすの
さく目ごかゐるし　小乱を焼之毛刀乱す
うこは二代まで日本之太刀より備州備国
光とも之太刀より刀しるみこ之まで其し
毛刀は中心あるし
一　吉正　景長　粟田口備後　号国備　小鍛冶

太刀ゆめほそく志のきいうす細くつうま子鍛冶
松目之かそすく丹を焼之増はさし恵多
丹いろつ上　小乱丹を焼之　太刀いまれ也
刀みすうとはをもくはなりみに作刀
のほしつへり　吉光に似つて吉正は吉光の
子ともに云　景長は吉正の子と云　但其子云之
一　吉則　清則　雲上　盛則　永則　号為永
将花園天皇御宇永慶比

太刀姿ほそし志のきこゝろしい目り中きる
ひ松目之地ゝこゝろこゝハ志るめまて上里し
ほうすくみ丹を焼之おゝ丹ゝ神ゝるゝ
丹のふちこゝろやうにふへあ里丹さゝへまいも
くめのきこゝろひあ里とゝ清りあ里ちかし
えりハ應永時代の備おれのてしきる
ひ備おまかりゝ丹の心ハふる里雲
上盛則永則此三人ハ吉則清則ハ

ハ家と云相口傳ゝ
一則宗 中上ハ物 ほ鳥羽院御宇 ラ 暦比 備前
大刀姿ほそし志のきかゝ家ゝ知るゝよう切
えしほむるゝハ目里中しきこゝひ松目之ハ
ふしこゝろ地をしそこまゝく見えて上里
みあ里丁子乱丹を焼之丹を志ろし見ま
そこにまゝみあ里丁子丹ゝ心は八宝様の
花をしなしへるかしし

あらはれて[illegible]成れ之ふへしあつて
子丑にけいきを燒之然而上ゟ之則宗太
刀に院より是の作あつて菊一文字と云
是之菊作の者夏慣たゝきのきわけ
丁子丑を燒之則宗と名乗を打太刀
といふ丑孫心かわるつて玉丑をこしもとよ
つて燒之菊作乃時ハ地をこれ勝常之
丑をこも一段之ろくふ[illegible]

則宗と銘打ハ鎧治同國にあり是ハ上手
なれこしを中乱丑に燒てそれハ黄久
すくに燒之きうひいふにも二段の之傳あ
二代目乃事之初のハ正恒よりあるわ右乃則
宗と銘中心乃心も大略ある事ハ口傳
一安則 後鳥羽院御宇元暦比則宗也
太刀姿のほうくそわ[illegible]之のきいみ[illegible]
丑へよりきうひ花目にていほうを[illegible]地

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

上ニ云ヘ刃ニ至テ[illegible]
[illegible]
黄し大一文字見之さきの刃傳ハ何
もすく神ニ[illegible]一文字乃[illegible]
一助成 下上ニ[illegible] 一 [illegible]
大刀次のかたく黄にきさひ柾目之[illegible]
中比ニ志ゝめ之乱刃ニ焼刃のもやう助宗
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
一助延 中 一 同御宇同時代
大刀次のかたり[illegible]
[illegible]
[illegible]
一宗吉 中上ニ[illegible] 同御宇同時代傳ハ一方[illegible]

大刀姿そんは目にしたること
なしかるとひ花目いふしこまやの地
ゆうしきくきてあつと乱刃を焼之但丁子
刃しあつと姿則宗に似るわ勇常之
刃ならこうこまつめまて上志ろしふへあつ
こまやの之志のきいみ目ならんかくるこ
すくれたる上ノ事之
一吉家 丁上 同御宇 同将代

太刀姿目ろめまて唐中国をつくしるこ此指
地ゆうしたるまこ丁子刃ならみ刃ならこまつ
姿則宗に似つと相口伝ありし
一反成 一条天皇御宇 正暦比 吉伝ゆ
太刀姿目ろく鍋せはしそつと言ふく唐中
雅花目をていふしこまやの之乱刃を焼之陣
本を目ろく焼ありしかつくしくいろへを焼
忍常之地ゆうしたるこ我らまこ大服たるき

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

[illegible]

一助平 中上ノ品 同御字 長徳比

大刀姿 [illegible] 大乱刃 [illegible]

[illegible] 則宗 [illegible] 姫 [illegible]

[illegible]

一助包 中上ノ品 同御字 長保比 [illegible]

大刀姿 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一包平 中上ノ品 同御字 同時代

大刀姿 [illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

丑小乱さかひさつみ上ゆへ焼ふるに
あつと河内小り同路あつと純々別すし
一延房 中上 博多羽院御宇 元暦比
太刀次ぬけりし志のきかゝるくみなす
に切えつ乱る房中きつひ柾目地ゆ通
まるめ之丁子丑大ぬさに乱小へこまやと口伝
一信房 中上 同御宇 時代同
太刀次のかしすしたゝ此ゆ乱ゆへ房也

百十七

百十八

しきつひ柾目かたる上ゆへ丑ゆきに
乱丁子ゆ之則宗にかゝるゆ口伝あつし
一光忠 下上 博源草院御宇 宝治比
太刀次ぬたゝ此ゆ乱ゆたる腰ゆ宝あつて
鍋かせくく庵中地ゆ二つ之白めとよく
あつきつひ柾目丁子丑乱上平三ゆ通の
丁子ゆ焼 長光より是又あつし 粉口伝あつし
一長光 伏見院御宇 永仁比

大刀姿光忠より同し柄をかく鶴化し多く
庵中きすひ柾目こまやかはきこみてり
て或のりこ丁子丸ニ丁子丸ハ丸くむけ
くりとかくし或のこ丁子大姫さいえ
てそんへい黄丸に焼入りて丸ハ小さえま
て丁子乱ハあつて順慶ハ若之和口傳通し
一景光 下上 花園天皇御手應長比
太刀姿かきて日あつにたくのせたくいふ事

中瀬柾目地ニ丁之くと上ちあさ丸ハ上ハ事
ハあつ小乱丸志せん大ハ乱ハあつて芭光なと
乃如ハ丁子ハかりなし小ハこまやかこみたり
たせやうこきつ地上ハ地の内すくハ焼傳
一蕪光 得 既醐天皇御宇 建武比
太刀姿たくなを黄く大眼柄をかくたる
中五ヶ斗上すて丸くとしるく大切そんを庵さ
きつひ板目地ニ丁のいに白さしくあつ小し

丹ハ焼之太刀ハ景光にかゝつて乱を書し
焼ナ子ハまゝ焼之丹ゝ之まゝめ之太刀と刀乃
きゝひいわゝつて太刀ハ情を入ると見し
つゝて刀ハのをゝつゝ刀ハ地をゝにをゝめ
なる雅之子ゝ入つゝひきゝすに
たゝ黄し正宗ハ偶を得ゝ刀ハ雅
一長義中 埒光厳院御口ー 貞治比
太刀次たゝ黄ゝ切先のひて いかゝさゝ清

百廿一

百廿二

さゝし重かゝ子ゝ雅祖自作ニ云々キ子ニ成
てゝ刀ハ板目之地ニ見ゝかゝわれゝつゝ刀ハ
しをひゝ入ら渇之大乱のゝ神書焼之太刀ハ
きにしをゝ日ゝ焼て次第ひゝ焼之太刀ハ
大服ひゝつゝ乱ハ焼ハ入ゝ乱ハにおゝを之
又のゝ神乃ゝ子みゝ刀ハ神ゝ刀を地へ焼
こむ次刀ハいゝるゝ事
一吉平 去御門天皇御宇 兼元比

太刀姿そつと寄りし[illegible]に寄りし房ゆく雅
柾目之地をそこあらく見えてよつ思し丹白
さのわ足に隅ひを焼て[illegible]
へハ丹黄く大房にみゝる之雅口傳あり
一吉房下と四条天皇傳宇文暦比
太刀姿たゝる切えのひて房ゆし雅柾
目を繰りし地にたゝあつとてあそんゝつと堅
白めに思し丁子丹孔二ツ大[illegible]之丹ゝ白

之寄く見えてもくあつ雅口傳あるし
一吉え下ハ源草院御宇文應比
太刀姿吉房にあらつとの志のき黄く乱丹之
丁子ハあまはしやしかわの寄心之雅口傳
一貞真下と源草院御同時代
太刀姿の目をしのきひあつ志のきせは
房姿のくく雅柾目之こまやかに地ゝ思し丹
の神乱ゝこし丹きてつとと焼之さのわあは

ハ我を焼ケ子ハ其のみなし上ハ黄之焼
赤刃にあるを久つとしかあるとなるし鳴
一吉真 ト上 同時代同御宇 弘安比
太刀姿父貞真にあるつを服し地ニ石ニ
印し刃乱をこの人て焼物ありあるつを黄
くそのあしに焼目を赤に小足の入る
あるを貞真よりきらひむりやさらす鳴
一真利 好源草 俣法御宇 吉真ヵ子

太刀姿目ハ鳴かうしそこを服の
かたるへあらく地ニ赤すて房中刃陣
をかすく少乱小焼あして中目と大様ニなる
丁子刃を焼丁子のも面とやしき物之物
よるを切え乃用まて所にあしを焼入る事に鳴
一守家 中上ヵ内 同御宇 宝治比
太刀姿かきすし赤のき黄し房中切
えし中服相同ハ小ニまやの之地ニそこ

思ふ上まつし丁子丑ゑ上ゑ三ゑ上ゑ丁子
ゑ当焼て先へ志れくはなし丁子乃次ぬかと
こゝに心あつとひやう丑とくゝ山城にあつこ三重乃
丁子はありこゝみなをあらはして黄く焼ある位
のうつとの心はあつこ此ほゝ守家あつ重ゑ形口傳
一真守下上　同御宇　守家の子
太刀次守家のとし服花目とくへの甚あつ
房中乱丑丁子さのみこの神ゑ弟

先ず上ゑ目之きゝ見ひ地をさ　ゝ　ゝ口傳
一正恒中上り内　一条天皇御宇　永延比
太刀次ほゝ房中切先の形る服花目こ
まやの之地思ひにまつし大房なる乱丑ゑ
ゆゝく焼入作之ゑ丑ゑ三ゑ又なりし
地ぬあつとて一服とゝしき物之同國に同路三
人あつと初乃正恒道進物に入形口傳あつし
一近包下上　好鳥羽院御宇　建久比

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

太刀姿吉平のことし房中切先に中堀
目な神代あとんたるあと地ら望し丁子丹を
焼丹のいやし吉之房にしかゝ望れ口傳
一吉包 下上 安徳天皇御宇 養和比
太刀姿ほうらく毛しそわ宮らく志のきかさ
いし房なし切先つむる堀抜目乱丹上手
丹こしむを小乱を焼て中ほとを大乱を足を
なるく焼入之拘すよ望よ之 丹ほうめ

小足を入て易常之姿二字国 依にゆゑわれ口傳
一景秀 下上 淳源草院御宇 宝治比
太刀姿ふんはりつよに中切先之志のき黄く房
中梔をかく太刀ゆしきさひ抜め印望し乱
丹を足をふかく大物之堀むみまてねるを拘
丹をまるしかゝわかあ望光忠か弟子之れ口傳
一真長 下上 伏見院御宇 永仁比
太刀姿長光に似有ゆんを望つとに切先

つむるを梅かくなるべしかひ此ハ此ハ當ろ丁子ハ
いかにもこまやかなるとあるを雅さんうつを口傳
一雲生 下上 花園天皇御宇延慶比
太刀姿ゆんはかりつくに鍋黄くに鍋ゆ雅
柾目地つまし少乱黄直に沢を足を入て
焼みしあるを切えつむら易常を和口傳
一雲次 下上 同御宇文保比
太刀姿ゆんをかあるをそれ
しの名ハすし

鍋ゆるし丸こしい乱ハすくみに沢
あしを地へ焼入るを地をつまくそうすみて
仮中太刀に少るを切えの内すくに恐れ
か目ろしなるしまろしをかりかるを和口傳
一助真 下上 長城川天皇御宇貞應比
太刀姿そうをうくもし鍋か黄くに鍋ハ
中雅柾目こまやかなるをくえ之十一月ハ
番助成ゆるを父よろしとよ之丸のもやうハ

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97
ガラス使用

大一文字にあらず大乱えのこ来りその後
にきさみあこて丹えたりくときゆる心
地らこ見く丹まるめ之たゝ来のみ丹たゝ
此作ね州に一人あり何し上ゝ純ゝ別すへ
一信正下上出御門天皇御宇兼久比
太刀次めかほうし信房の子之父ゝ純仰
ゝ見きるひ恒目のさまにかのとす志のさ分
し乱丹を焼上手之様ゝ偽あらし

一則房　同御宇　一文字新
太刀次めそ有事に産あつ之房中雅恒目
のみるこさえてかゝて地らこ見し丁子其大房
なるをこまやかなるにませる見を地
ぬりく焼へ之ゝ為へ之ゝ此の天
名にあらず波と云太刀あり是様口偽
一助吉下　同御宇　一文字新
太刀次めそ見さるしぬんたゝ見つよし切えつ

まる房中服拵目こまやの之地をまつめに
てしまり白きにしてあつまみ助宗なとの様
にはくらせのはなしにしかに一文字あまま
こあつまを大きこ和さ多き之和口傳あつし
一元重 浮脫酬天皇御宇正中比
太刀姿ありて黄くみ目あつに鍋せて大股
極なかく房なし切えのひらつ服拵目
こまりはるもくくるあと黄金みに宜之

をつくるを大乱とあつ小ゝ和口傳あつし
一次家 下と浮色羽院御宇元暦比傳
太刀姿が若干あつ之志のきおせし房り
あきし地ら二重とくすみまる之小乱みを
中目とあるをさへ乱なし黄くく焼之みをあ
なめにかくし太刀孔をわ寄るし和口傳
一貞次 同御宇 傳中
太刀姿目ありし房中之鍋せいく地

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

ところしらしむ乃丹小乱にゐすあるを
黄し又すくに小あしをゐてし焼のうえ
しあつと大乱にあつと丹乃まうし姿弱
常也　猶口伝あるへし
一恒次　同御宇　日路一条院下より
太刀姿あつと高るしおほひろし小乱
丹なし焼庭中にきつく花目はうまうし
おもしあつとすみくつるたつゝあつとみある

あをめてきえつと姿弱常也
一正恒　下上　安徳天皇御宇　養和比
太刀姿あつと高く長し庭中きつくひ
花目いふしこまやかに地をつまし乱丹
にひろく焼て又いかにもかんなるおう
き丹をいろへてあつと丹まるき庭くまめ
にゆくし備中そ正恒是は正恒にせ
しぬ乃姿すまいし備中そ太刀大概

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

わ
特別
97

一やしの姿之治のすあ神とも別に見る
るなき故に書しるしにぬとりす
相口傳ありし

国立国会図書館　タイトル『刀剣鑑定書』 請求記号 わ-97
ガラス使用

わ
97

国立国会図書館　　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『刀剣鑑定書』　請求記号 わ-97

ガラス使用